

●モノグラフ小学生ナウ



読書

vol.2-8



©1982(株)福武書店 教育研究所/加藤智穂・貫川雅子・阿部悦子
奈良教育大学教授 深谷昌志・東京大学大学院 庄 健二

目次

特集 活字離れの目立つ若者たち	2
-----------------	---

調査レポート／読書

要約	6
----	---

1. 読書の実態	8
----------	---

- 子どもの持っている本の量 8
- 読んだことのある本 10
- 伝記との触れ合い 13

2. 読書の効用	17
----------	----

- 本を読むと、何が変わるか 17
- まんがと読書 21

3. 本の好きな子ども・嫌いな子ども	24
--------------------	----

- 本の好きな子どもの読書傾向 24
- 本の好きな子どもの読書行動 27
- 本の好きな子どもの自己像 30
- 本の好きな子どもを育てるために 33

シリーズ／子ども考現学

子どもの姿・昔と今(6) 入学試験	35
-------------------	----

資料1・調査票見本	41
-----------	----

資料2・学年・性別集計表	48
--------------	----

特集 ●

活字離れの目立つ若者たち

奈良教育大学教授 深谷昌志



活字中心の世代

学生たちが、まんが雑誌を片手に研究室へ出入りするようになったのは、いつ頃のことであろうか。少なくとも、学園紛争のあった頃——となると、15年も前になってしまうが——まで、まんが雑誌は、学生たちの陰の文化だったような気がする。

現実問題として、学生たちの間で、まんがを読む者が多かったとしても、大学生になっ

たら読書をするのが望ましいというたてまえが生きつづけていた。したがって、まんがは下宿へ帰って読むか、あるいはカバンの中に入れておくもので、教師たちの目に触れることはなかった。つまり、まんがを読んでいる自分に、多少なりともうしろめたさやてれくささがあり、恥の感覚を伴っていたような気がする。

筆者の大学生時代と言えば、四半世紀昔の出来事になる。高校時代、スポーツに熱中し、その後、どろなわ式に受験勉強をして大学へ

入ってきたので、読書などとは縁遠い存在であった。しかし、大学生活が始まってみると、「チボ一家の人々」や「戦争と平和」などを片手に、教室へ入ってくる仲間が少なくない。

今になって考えると、彼らがそれらの本をどの程度理解していたかは疑問が残る。しかし、ジードやトルストイはおろか、ヘッセなどの横文字の小説を手にしたことのない者には、クラスメートの姿はひげ目を感じさせる以外の何物でもなかった。

1年生の夏休みは、とりあえず日本文学を読破することに決め、文庫本を読みまくった。大学生になって、漱石だの鷗外などを読んでいのはなんともやほったいが、かと言って、読んでもいないのに読んだふりもできず、秘かに読むことにした。

夏休みが終わり、こちらも横文字の文学の仲間入りができると思ったのに、クラスメートの読んでいる本が、様変わりをしている。カミュ、カフカ、リルケが幅をきかせ、今さら、ロマン・ローランでもあるまいという雰囲気である。

あわてて、「ベスト」や「シュジュホスの神話」を読みにかかると、敵はケルケゴールやニーチェを手にしてしている。そうした一方、「資本論」にうつつを抜かす仲間も出てくる。中には、エーリッヒ・フロムの「自由からの逃走」こそが必読の名著だと説く者もいる。

フロイドの「夢分析」などという本の名を覚えたのも、そうした頃だったような気がする。いずれにせよ、仲間からの刺激を受け、1年生の前半で日本文学、後半から2年生にかけて西洋文学、そして、2年生の夏休みにマルクス、エンゲルスへ進み、3年生になってか

ら専門書ともいうべきベストロッチやデューイなどを手にし始めたというのが読書の軌跡となる。

映像メディアの世代

筆者より数年前に大学生活を送った人の場合、「善の研究」や「三太郎日記」が新入生にとっての必読文献だったと聞く。

こうした個人的な回想を書き綴ったのは、他にもない。まんがを中心の現在の学生たちを見るにつけ、かつての活字中心の読書が、人間形成の中でどんな意味を持つのかを考えたかったからである。

本モノグラフ・シリーズでもVol. 1-4で「まんが」を分析したことがある。活字育ちのわれわれは、ともするとまんがの持つ短所のみを強調しがちになる。しかし、データの示すところによると、子どもたち、そしてたぶん大学生たちにとっても、まんがは肩のこらない気晴らしの対象で、まんがを見ているからといって、発達のスタイルにゆがみを伴うとは言えない。というより、むしろ統計的な確率の問題としては、学業成績のよい子どもの中にもまんが好きが少なくなく、むしろまんが嫌いな子どもは学業不振ぎみの子どもに多いという結果が得られている。

そう言われてみると、思いあたることがある。この2-3年の傾向として、ゼミでレポートをする時、レジメにカットを入れる学生が多くなった。バイキン君だの、アラレちゃんなどをもじったもので、吹き出しを読むと“I am tired” “Gokurosan”とか“See you again”などと書かれている。

困ったことに、そうしたカットのできばえとレポートの質とが相関している割合が高い。レジュメのできのよい子は、カットもエスプリが効いているのに、レポートもカットも駄目という学生が見受けられる。もちろん、ごくまじめなタイプで、カットやイラストなしで、水準の高いレポートをする学生もいるが、そうしたタイプは、なんとなく人間的な幅が狭いような気がする。

したがって、まんがはニュー・ミュージックやソフト・ドリンクと同じように、生活の中のささやかなオアシスで、目くじらを立てるのはやほと言うべきなのかもしれない。

そうは言うものの、学生たちを見ていて、彼らの思考力に疑問が浮かぶのは否定し難い。手にするのはまんが雑誌、そして、暇になると、カセットを取り出してニュー・ミュージックを聞き、時にはウォークマンをつけて外出する。もちろん、テレビで何時間かを費やすこともある。

朝から夕方まで、視聴率メディアにかこまれた生活である。活字メディアと接する機会と言えば、スポーツ新聞と大学のテキスト、そしてアルバイト・ニュースぐらいなのであろうか。

学期末のレポートに、読書感想文を提出させることがある。しかし、その大半は新書版を要約する程度で、分厚い本を読破した気配はない。

考えてみると、学生たちはテレビを子守り歌代わりとし、学習まんがになじみ、深夜放送を受験勉強の友として育った世代である。したがって、テレビのない時代に育ったわれわれと異なり、多様なメディアをとおして、情

報を入手するのには慣れていよう。

しかし、大学生で漱石の「虞美人草」や武者小路の「友情」などを手にしていると、読書家と言われる風潮は、やはり異常と言わざるを得ない。

筆者の専門である教育社会学にしたところで、専門コースに入るためには、リースマンの「孤独なる群衆」やミルズの「パワー・エリート」、あるいはエリクソンの「アイデンティティ」などを読むのが前提となる。しかし、教育関係の新書版すらも手にしない学生が多い。となると、とにもかくにも、ある程度の水準に達した新書版の読み方を手ほどきする必要が生まれる。そうした過程を乗り越えない限り、専門と呼べる境地へと進めないのである。

かつての活字崇拜にも似た感情を、現在の学生に求めるのは時代錯誤であろう。しかし座っているだけで、イージーな形で情報を入力できる現在だけに、活字をとおして自分の考える力を育てることの必要性を感じる。

読書の効用

そうした状況は、子どもの場合にもあてはまろう。「泣いた赤鬼」をテレビ、あるいはまんがで見る。キャラクターが具体的な姿を持って追ってくるから、何も考える必要はない。テレビならば、だまっけていても30分もしないうちに答えを出してくれる。そして、まんがの場合も、赤鬼や青鬼が具体的なイメージを見せ、しかも、やや誇張した形でイラストがつけられるから、吹き出しの文を読まなくとも、ストーリーの展開を理解できる。



しかし、仮りにこれを文字だけの本で理解しようとするなら、まず赤鬼や青鬼についてのイメージを、自分の頭の中に作り出さなければならない。そして、さりげない会話や行動などを手がかりとして、主人公の性格を固めていく。そうした作業ができ上がっていないと、「赤鬼がなぜ泣いたのか。が理解できなくなる。

宮沢賢治の「注文の多い料理店」や「セロ弾きのゴーシュ」、あるいは小川未明の「赤いろうそくと人魚」、そして坪田譲治の「子供の四季」、新美南吉の「ごん狐」、芥川龍之助の「くもの糸」など、現在では古典と言われる名作童話のかずかずは、子どもたちが自分なりにゴーシュ像を作り、善太のイメージをふくらませるから、子どもの心に残りつづけるのであろう。

つまり、読書とは活字を媒介として、書き手と読み手とが対話をかわす営みであり、その際、読み手のサイドに主導権が握られている。わかりにくくなったら、前へ戻り、そして速度をおとしてストーリーを読み取るのは、読み手の方だからである。

したがって、読書とは、読み手の自主性が大事な作業で、そうした過程を重ねるうちに子どもたちの中に、文字をイメージへ転換するという抽象力が育ってくる。

それに対し、テレビやまんがは、なんと言っても送り手中心のメディアであり、受け止め手は、受容するという形で情報を吸収するだけにすぎない。しかも、そうした生活に慣れてしまうと、頭を使って考える態度が薄れてくる。

まんがが生活の中のオアシスであってもよい。しかしオアシスは、あくまでオアシスの範囲にとどまるべきで、それとは別に、子どもたちが成長するためには、文字を媒介として本と対話をする時を持つ必要がある。

しかし、先回りをして問題を指摘しすぎたかもしれない。子どもたちが活字離れをしているのは否定しがたいように思われるが、問題となるのは、活字離れの程度であろう。子どもたちが、実際に活字離れをしているのか、そして、読書にどんな気持ちを持っているのか、論じるより先に、まず実態をとらえてみる必要があるだろう。

調査レポート／読書

奈良教育大学教授 深谷 昌志
東京大学大学院 庄 健二

子どもたちは、テレビやまんがにかこまれた生活をしていて、活字離れしているのではないか。そうした気持ちから、子どもたちの活字メディアとのつきあい方を調べることに

した。その際、子どもたちが本を読むことの意味を大事に考えているのかもとらえてみようとしたりしたのが、本報告書である。

要約

① 40冊

子どもたちが持っている本は、ほぼ40冊で、図鑑やまんがが多く、少年少女文学や伝記は少ない。(図1・2)



② ヘレン・ケラーが6割



伝記の中でもっとも読まれているのはヘレン・ケラーの58%で、野口英世を読んでいる者は49%にとどまった。(図6)

③ 読書をすると思える力がつく 39%

子どもたちが読書の効用として挙げたベスト3は、「漢字を覚える」、「考える力がつく」、「作文の力がつく」であった。(図8)



4 中学校へ行ったら
読書をする 65%

子どもたちは、中学そして高校へ行ったら、今よりもっと読書をするようになると思っている。(図11)



5 20対33

本の好きな子どもが、週に1回以上本屋へ行くのが33%であるのに対し、本の嫌いな子どもが行く割合は20%にすぎない。(図15)



6 本の好きな子どもは、
作文が得意

本の好きな子どもは、作文が得意だけでなく、考える力があると思っている。(図18)



7 本の好きな子どもは、
本の好きな家庭から

本の好きな子どもの父親の53%は本が好きなのに対し、本の嫌いな子どもの場合、本の好きな父の占める割合は32%にすぎない。(図19)



サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	117	143	260
5年	235	197	432
6年	383	384	767
計	735	724	1,459

調査概要

対象●大阪近郊の小学4～6年生
時期●昭和57年5・6月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 読書の実態



子どもの持っている本の量

商売柄、本を手にする機会が多い。しかし隣接領域の専門書などで、高額の本だと買う決意をする前に、何度となく立ち見をすることになる。結局は大枚を奮発するのだが、家に帰って落ちついて目をとおしてみると、立ち見の時と本の印象が違う。予想以上に薄べらな本のこともあるし、中味のぎっしりとつままった拾いもの場合もある。

資料として利用する本を除くと、本とは所詮、自分で買って読むものという気持ちが強まって現在を迎えている。そうした事情は、子どもの場合もあてはまろう。例外もあろう

が、身近に本があるという環境が、読書好きの子どもを育てる可能性が強い。

特に、現在の子どもの向けの本は、何百円単位のものが多い。したがって、生活水準の上だった現在では、本は必ずしも高価と言いきれない。したがって、自分の本を持っているかどうかは、経済力の問題でなく、価値観の問題——つまり、何に、お金を使っているか——に帰するように思われる。

そこで、まず子どもたちの持っている本の冊数を調べてみよう。

1～5冊	5.3%	} 12.7%
6～10冊	7.4%	
11～15冊	8.3%	} 20.5%
16～20冊	12.2%	
21～30冊	16.5%	} 30.3%
31～40冊	14.6%	
41～50冊	12.7%	
51冊以上	36.5%	

大ざっぱな言い方をすると、20冊以下、20～50冊、51冊以上がそれぞれ3分の1、平均の蔵書数が40冊という割合になるが、5冊以下が5%、51冊以上が37%のように、子どもたちの読書環境に大きな開きが認められる。

もともと、図1からも明らかなおおりに、さすがに学年が上がるにつれて、本を持つ割合が増え、6年生になると、42%が51冊以上の本を持っている計算になる。

しかし、これらは本の種類を問わずに、冊数のみを尋ねた結果なので、ジャンル別に持っている冊数を調べると、図2のとおりとなる。半数近くの子どもたちが、11冊以上持っているのは図鑑とまんが本で、物語や童話の本は、平均すると5～6冊、そして伝記は1～2冊の割合となる。つまり、まんが本は図鑑の間に、童話や伝記の本がちらほらというのが、子どもたちの本棚の中味のように思わ

図1・持っている本の冊数

	1～10冊	11～20冊	21～30冊	31～50冊	51冊以上 (%)
4年生	20.4	22.3	17.3	12.7	27.3
5年生	17.4	22.0	16.2	13.0	31.4
6年生	7.4	19.1	16.5	14.6	42.4

図2・ジャンル別の本の所有

	11冊以上	7～10冊	3～6冊	1～2冊	1冊もない (%)
図 鑑	45.6	11.5	20.8	14.0	8.1
まんが	45.5	13.8	24.1	11.6	5.0
物 語	28.9	13.7	34.1	17.1	6.2
参 考 書	4.6	11.2	36.0	25.8	12.4
辞 書	11.8	6.0	45.5	32.7	4.0
伝 記	9.0	7.8	26.2	27.7	29.3

れる。なお、学年別に11冊以上、本を持っている割合を見ると、以下のようにほとんどのジャンルで、学年が上がるにつれて本を持つ割合が高まっている。

	4年生	5年生	6年生
図鑑	41% <	49% <	54%
まんが本	43% <	48% <	52%
物語・童話	27% <	32% <	37%
参考書	13% <	15% <	22%
辞典	14% >	9% <	15%
伝記	8% <	10% <	13%

なお、新学期になってから、子どもが自分で買った本の冊数は、1～2冊、金額にしてほぼ1,000円、また買ってもらった本も2～3冊、1,000～1,500円程度である。本調査を実施したのは5月末から6月にかけてであるから、新学期がスタートしてからほぼ2か月を経過している。その間、子どもたちの本棚に3～4冊、つまり、1か月にほぼ1～2冊、本が増えている計算になる。

読んだことのある本

もちろん、今までの考察は、あくまで本を持っている冊数であって、この他、友だちや図書室で、本を借りて読む場合もあろう。

そこで、少年少女文学として定評があり、しかも、子どもたちが利用しやすい本を20冊選んで、それらを読んだことがあるかどうかを尋ねた結果が図3である。

この結果をどう解釈するのは難しいものを含んでいる。「トムソーヤの冒険」から「青い鳥」までの6冊は、半数以上の子どもが読んだ経験があると答えており、「宝島」までの11冊についても、読んだことのある子どもが3割を超える。

もちろん、この中には「ガリバー旅行記」や「ロビンソン・クルーソー」のように、絵本でおなじみの本も含まれているが、「小公女」や

「坊ちゃん」など、絵本でとりあげにくいものも少なくない。したがって、少なくとも子どもたちは程度の差こそあれ、全体としては本に親しんでいる印象を受ける。

もっとも、図4によると、20冊の中で男子の方が読んでいる割合の高い本は、「海底2万マイル」などの4冊にすぎず、残りの16冊は女子の方が読破率が高い。中でも「小公女」「若草物語」「小公子」など、いわゆる少女文学については、女子の読破率が男子を圧倒している。

また図5からも明らかのように、子どもたちが本を読む割合は、学年が上がるにしたがって高まっていく。4年生から5年生、そして6年生と、文字を読む力がついてくるにつれて、読書の対象が広がってくるのであろう。

図3・読んだことのある本

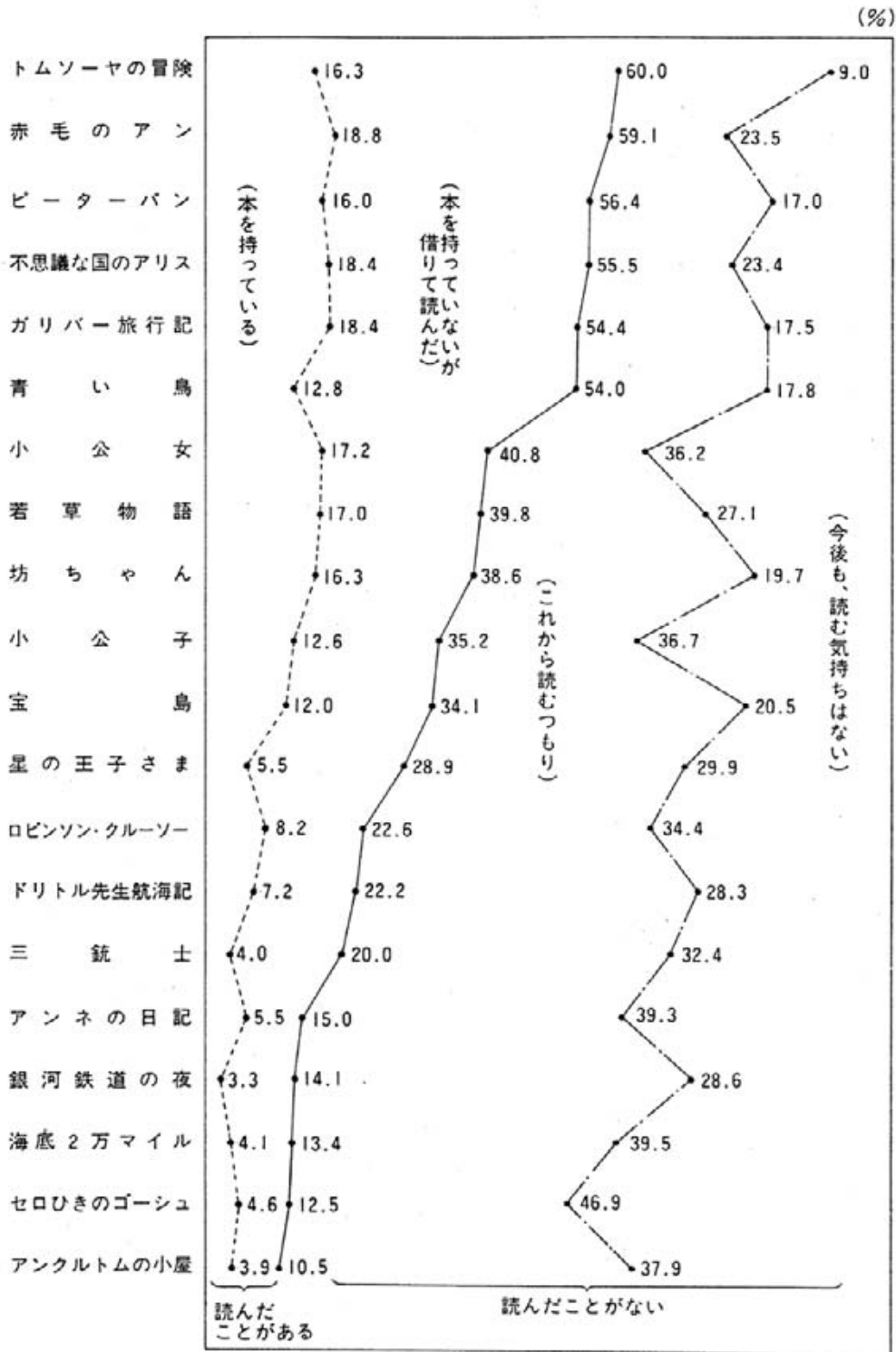


図4・読んだことのある本（性別）

(%)

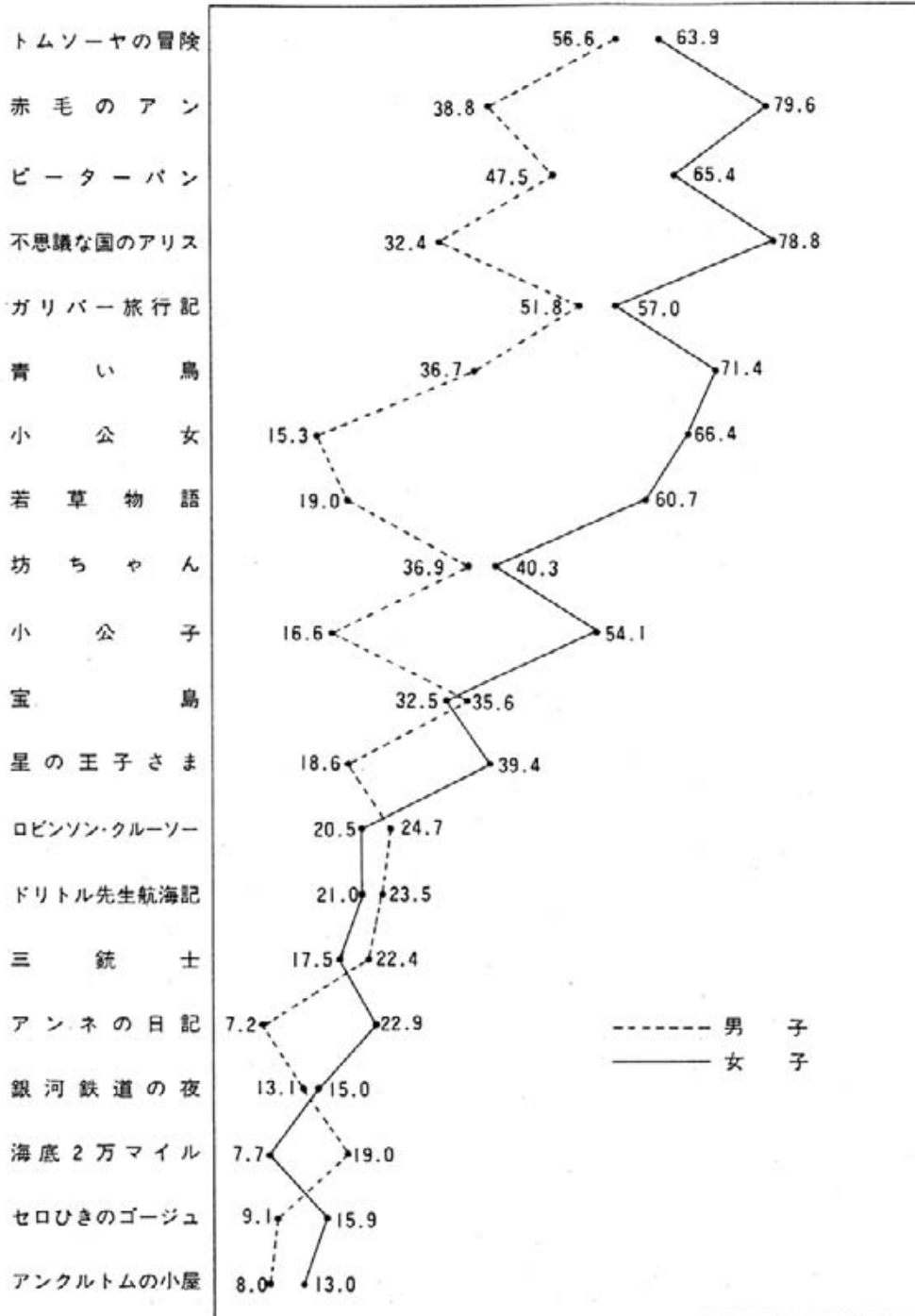
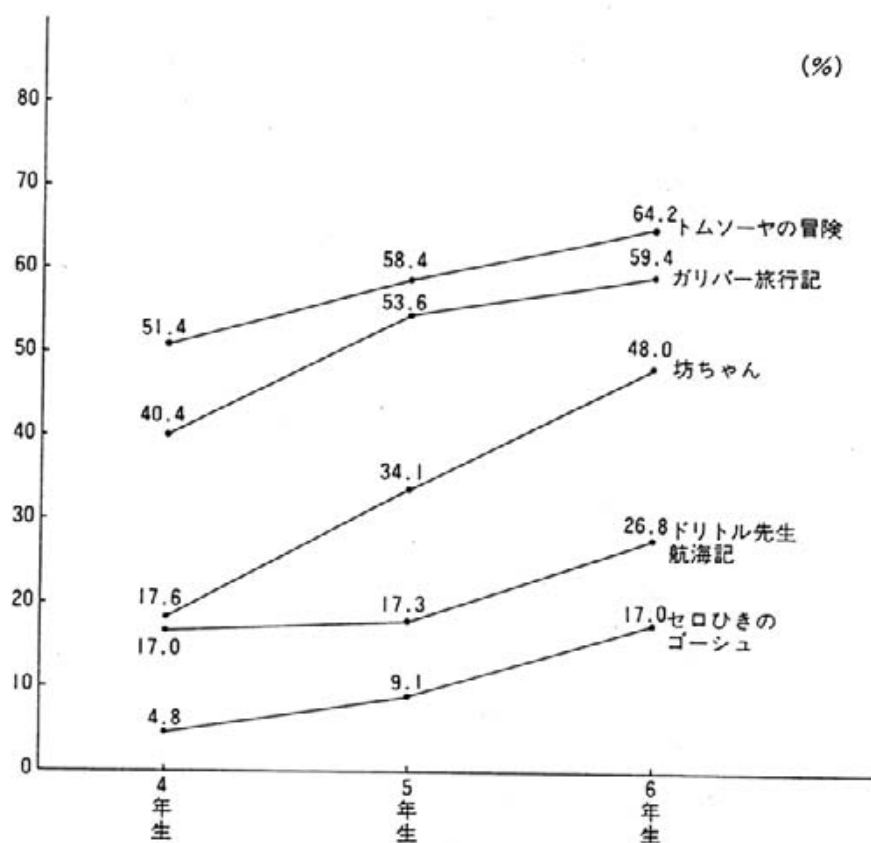


図5・読んだことのある本(学年推移)



伝記との触れ合い

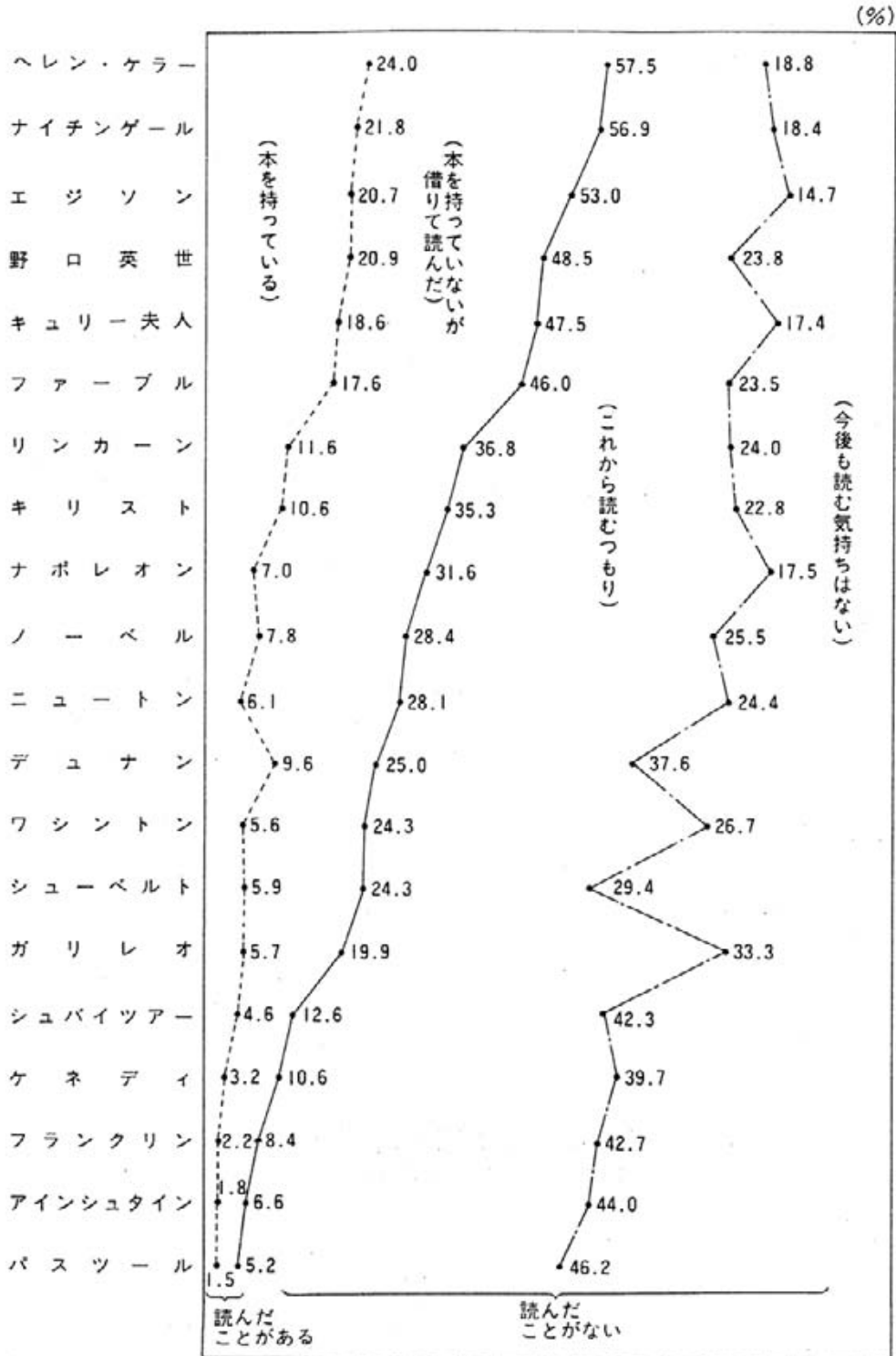
子どもの時代の読書というと、今まで触れてきた少年少女文学と並んで、伝記の存在が頭に浮かんでくる。

ヘレン・ケラーやキュリー夫人の伝記を読んで、そうした人にあこがれを抱き、将来の生き方を決めた人も多かろう。しかし、この

ところ、子どもたちの中から伝記の影が薄れてきたような気がする。

野口英世やエジソンではなく、「巨人の星」や「サインはV」を見て、将来の生き方を考えたという大学生は少なくない。そこで、伝記を読んでいる割合を調べると、図6のとおり

図6・伝記を読んでいる割合



となる。

子どもたちにとっての伝記のベストセラーはまず、ヘレン・ケラー、次いでナイチンゲール、3位にエジソン、そして野口英世で、ファーブルまでの6冊は、半数以上の子どもが読んでいる計算になる。

この結果は先ほどの少年少女文学の場合と同じように、今の子どもたちが伝記離れをしているという前提に立てば、思ったより読んでいると評価できよう。しかし、かつての子

どもたちを基準にすると、ヘレン・ケラーでも4割の子どもが読んでいないのであるから、読書量が少ないとも解釈できる。

調査を担当した筆者としては、なんとなくもう少し伝記離れしている感じを抱いていたので、正直なところ、予想していたより読んでいる子どもが多いような印象を受けた。

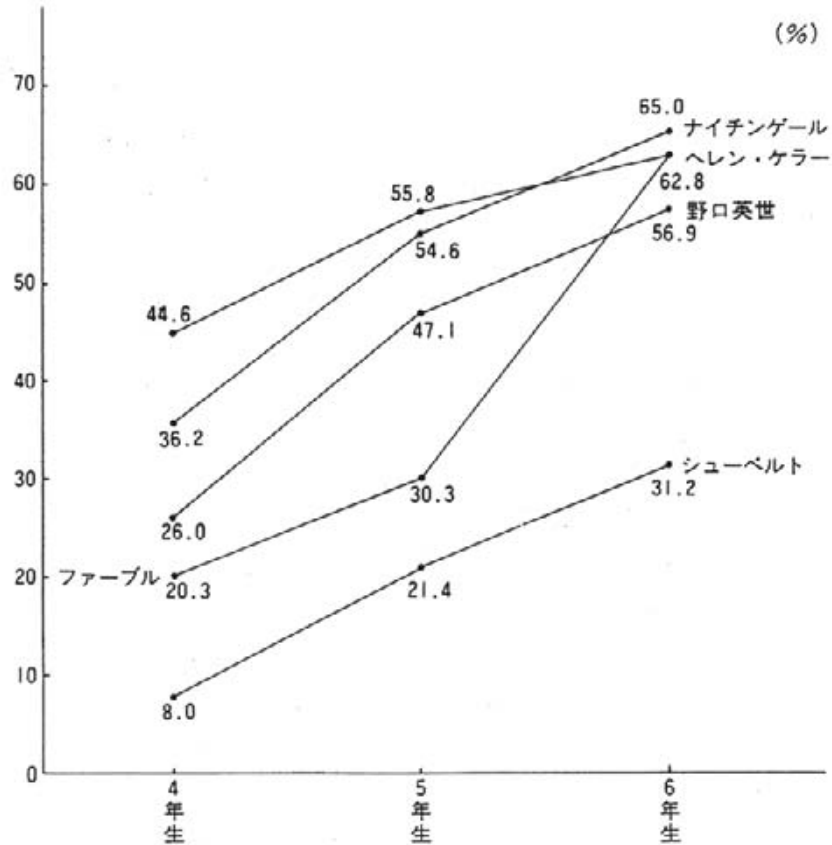
なお、男女別の読破率を表1に掲げたが、伝記の人物20人の中、9人は男子の方が女子より読んでいる割合が高く、女子はヘレン・

表1・伝記を読んでいる割合(性別)

(%)

項目	性別			項目	性別		
	女子	男子	男子 女子		女子	男子	男子 女子
ヘレン・ケラー	75.7	55.7	0.74	ニュートン	24.1	32.1	1.33
ナイチンゲール	72.7	41.2	0.57	デュナン	28.2	21.7	0.77
エジソン	50.1	55.7	1.11	シューベルト	29.9	18.7	0.63
野口英世	50.4	46.7	0.93	ガリレオ	16.3	23.4	1.44
キュリー夫人	57.6	39.4	0.68	シュバイツァー	14.4	10.7	0.74
ファーブル	46.6	45.3	0.97	ケネディ	9.4	11.8	1.26
リンカーン	35.9	36.7	1.02	フランクリン	8.6	8.1	0.94
キリスト	40.3	30.4	0.75	アインシュタイン	6.0	7.2	1.20
ナポレオン	30.7	32.6	1.06	バスツール	5.3	4.9	0.92
ノーベル	27.8	31.0	1.12	ワシントン	24.1	24.5	1.02

図7・伝記を読んでいる割合(学年推移)



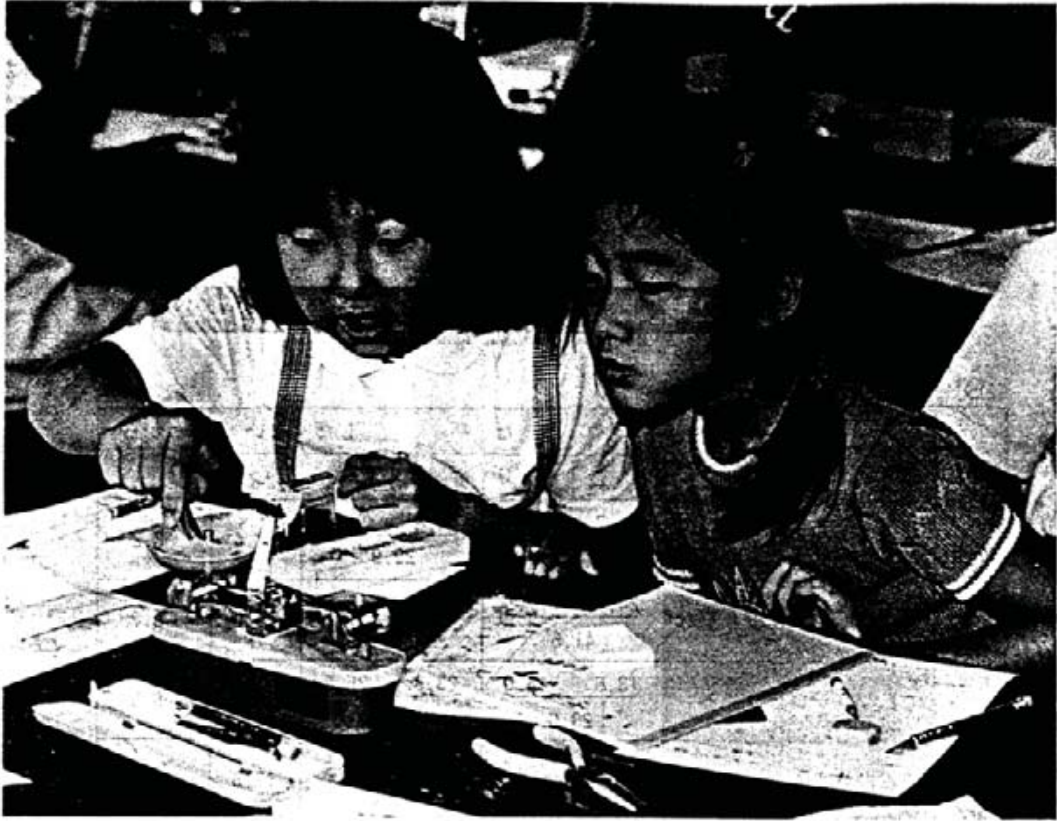
ケラーやナイチンゲールなどの女性の伝記に人気が集まっている。

また、学年別の読破率については図7に示したとおりだが、学年が上がるにつれて伝記を読む子どもの割合が、着実に増加している。

われわれ、おとなにとっての1年は、惰性のくりかえしで過ぎていく感じがしないでも

ない。しかし、子どもたちは1年間が過ぎると、精神的に成長していく。少なくともその1年間に、伝記を読んだり、少年少女文学を手にしたたりして、自分なりの世界を広げている。図7は、子どもたちのそうした心の成長を示すようなグラフとも読みとれよう。

2. 読書の効用



● 本を読むと、何が変わるか ●

今まで触れてきたように、子どもたちは、思ったより本を読んでいる印象を受けた。少なくとも、標準的な子どもをイメージに置くなら、少年少女文学の何冊かと、伝記の何冊かを読んでいたからである。もちろん、考え方によれば、子どもたちは、放課後何時間かの自由な時間を持っているのであるから、6年生になって読んだ本が2-30冊というのは少ないという見方も成り立ち得る。毎日2時間半も費やしているテレビ視聴を半減させれば、毎日1時間は読書の時間がとれる。そうすれ

ば、毎週1冊、1年間でほぼ50冊の本を読み得る。となると、子どもたちが、予想以上に本を読んでいるような印象を受けたのは、活字離れを念頭に置きすぎた発想で、子どもは本来、もっと本を読むべきだという指摘の方が正しいのかもしれない。

そこで、子どもたちが読書の意味をどうとらえているのかが問題となる。つまり、現状のままでよいと考えているのか、それとも、もっと本を読まないといけないと思っているのかの問題である。

表2は、「もし2時間ぐらい暇ができたなら何をしたいか」と尋ねた結果である。子どもたちのやりたいことの第1位に「友だちと外で遊ぶこと」が挙がっている。これは、子どもとして当然の反応であろう。そして、第2

位に、テレビやまんがを押さえて、「好きな本をのんびり読む」が位置している。

この場合、「好きな本」というワーディングを使っているので、子どもによっては、ルパンやシャーロック・ホームズをイメージに置いた

表2・もし2時間ぐらい暇ができたならやりたいこと

(%)

項目	尺度		やりたい			したくない		わからない
	ぜひ	かなり	やや	あまり	ぜんぜん			
友だちと外で遊ぶ	39.7	17.8	18.8	11.1	4.4	8.2		
	57.5		29.9					
好きな本をのんびり読む	24.1	17.5	25.2	15.5	9.0	8.7		
	41.6		40.7					
のんびりテレビを見る	13.6	16.0	23.8	25.8	14.5	6.3		
	29.6		49.6					
のんびりまんがを読む	14.7	14.2	25.5	19.5	17.6	8.5		
	28.9		45.0					
友だちと室内で遊ぶ	11.1	13.3	20.3	26.0	19.2	10.1		
	24.4		46.3					
予習か復習をする	3.1	5.7	17.1	32.2	28.0	13.9		
	8.8		49.3					

かもしれない。しかし、どう考えたにせよ、子どもたちが読書の楽しみを知っていることを暗示させる結果である。

そこで、改めて読書の効用を「今よりずっとたくさんの本を読んだとしたら」という問で尋ねることにした。

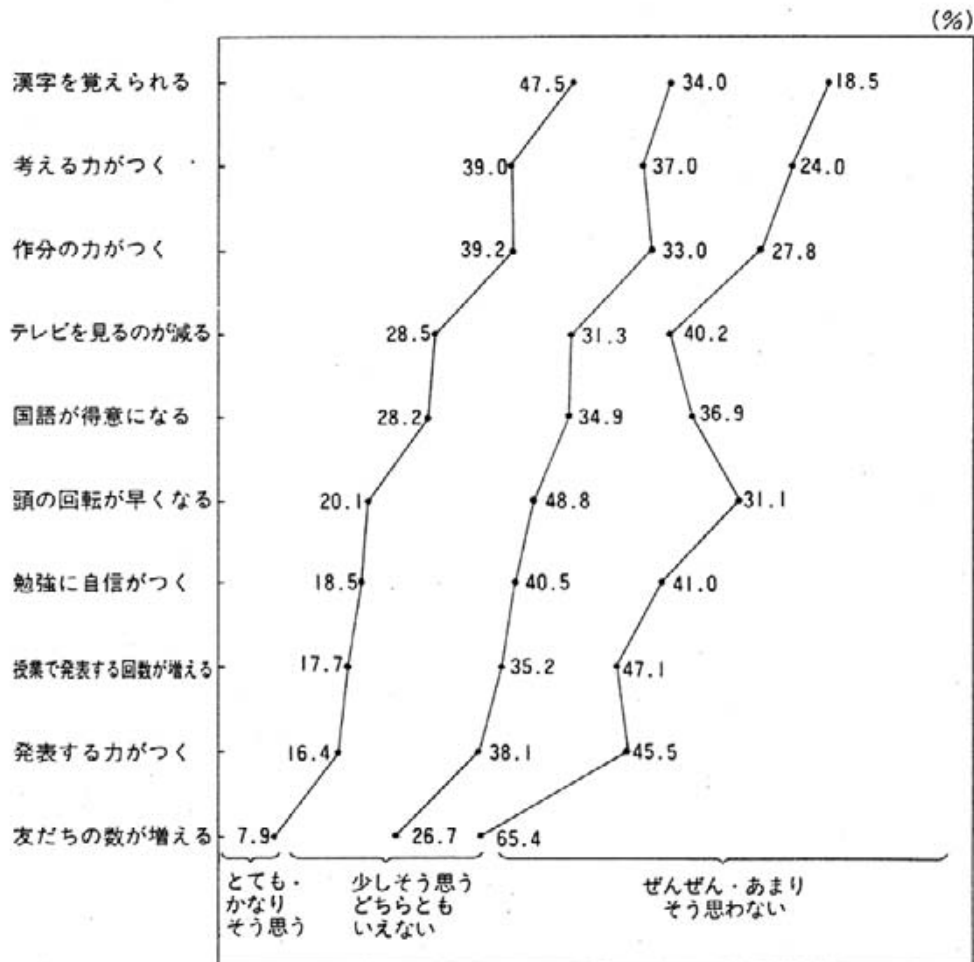
図8に示したように、読書量を増やしたか

らとって、友だちの数が増えたり、勉強の成績がよくなることはあるまい。しかし、

- ① 漢字を覚え
- ② 作文の力がつき
- ③ 考える力がつく

だろうと、子どもたちは考えている。

図8・読書の効用



端的に言って、国語の力がつくと同時に、考える力が伸びるというのが、子どもたちのとらえた読書の効用である。そして、表3に

示したように、そうした見方は学年が上がるにしたがって、強まる傾向を示している。

表3・読書の効用(学年別)

(%)

項目	4 年		5 年		6 年	
	とても	かなり	とても	かなり	とても	かなり
漢字を覚えられる	23.4	15.2	24.0	18.9	29.8	23.2
	38.6		42.9		53.0	
考える力がつく	16.5	15.7	17.8	18.8	23.0	19.7
	32.2		36.6		42.7	
作分の力がつく	16.0	18.0	18.6	13.7	28.0	16.8
	34.0		32.3		44.8	
テレビを見るのが減る	14.6	11.5	18.6	9.7	18.9	10.3
	26.1		28.3		29.2	
国語の力がつく	15.7	11.4	14.0	9.8	17.3	13.7
	27.1		23.8		31.0	
頭の回転が早くなる	8.9	30.4	9.5	32.1	9.3	36.7
	39.3		41.6		46.0	
勉強に自信がつく	10.0	11.6	9.3	10.7	7.9	8.7
	21.6		20.0		16.6	
授業で発表する力がつく	14.7	11.9	9.2	5.5	7.6	8.8
	26.6		14.7		16.4	
発表する力がつく	10.6	7.8	8.5	7.4	7.0	9.0
	18.4		15.9		16.0	
友だちの数が増える	10.7	3.2	6.1	3.5	2.4	2.6
	13.9		9.6		5.0	

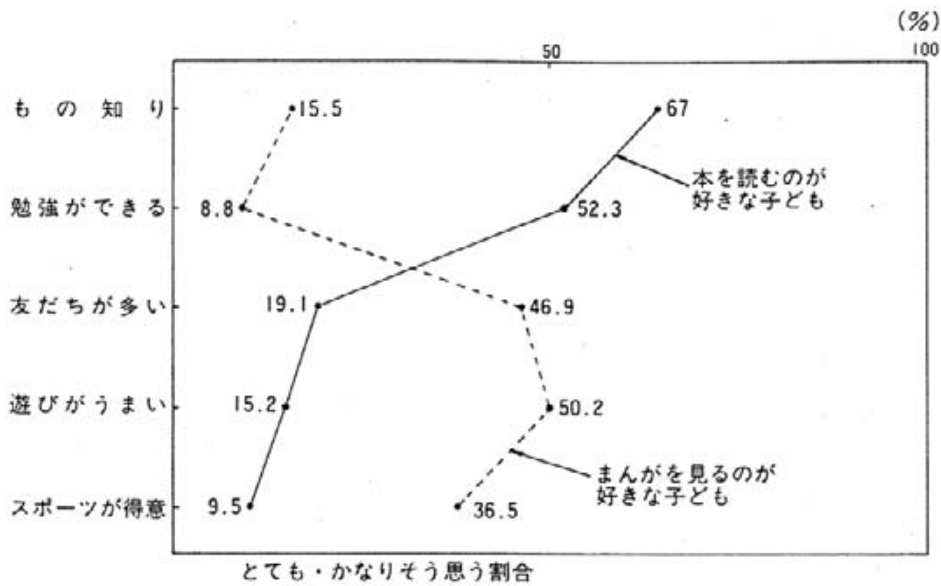
まんがと読書

そこで、ややアングルを変え、まんがの好きな子どもと読書の好きな子どもとを念頭に置いてもらい、それぞれどんな子どもなのかを尋ねた結果が図9である。これをさらに要約すると、

読書の好きな子ども＝もの知りで、勉強ができる

まんが好きな子ども＝遊びがうまく、友だちが多く、スポーツが得意
 のとおりとなる。読書好きは優等生タイプ、そしてまんが好きはガキ大将タイプというイメージである。本が好きというと、子どもたちは内向的で、まじめな勉強好きな子どもを思い浮かべるらしい。

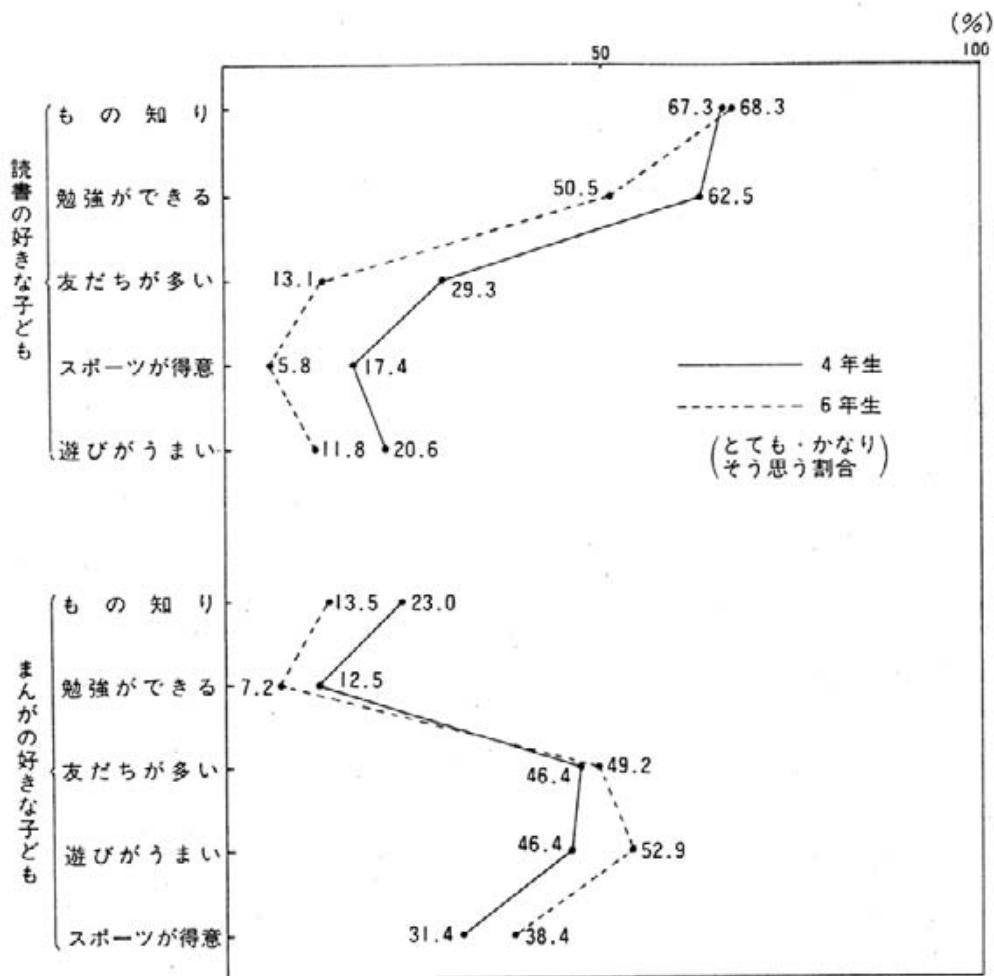
図9・まんがの好きな子ども・読書の好きな子ども



しかし、そうした見方は図10に示したように、4年生の方に顕著に表れており、6年生になると本好きの子どもに対し「友だちが少なく、遊びがへた」と思う割合が減ってきている。全体として、学年が上がるにつれて、読書好きの子どもに対する評価が高まってくるのであろう。4年生の学級ではスポーツの得意な外向的な子どもが、クラスのリーダーシップを握る。しかし、6年生になるとそうした外向性と同時に、読書をするといったような内向的な充実も、仲間を評価する視点の一つに入ってくる。仲間を評価する尺度が、

るのであろう。4年生の学級ではスポーツの得意な外向的な子どもが、クラスのリーダーシップを握る。しかし、6年生になるとそうした外向性と同時に、読書をするといったような内向的な充実も、仲間を評価する視点の一つに入ってくる。仲間を評価する尺度が、

図10・読書の好きな子ども・まんの好きな子どもに対する学年推移

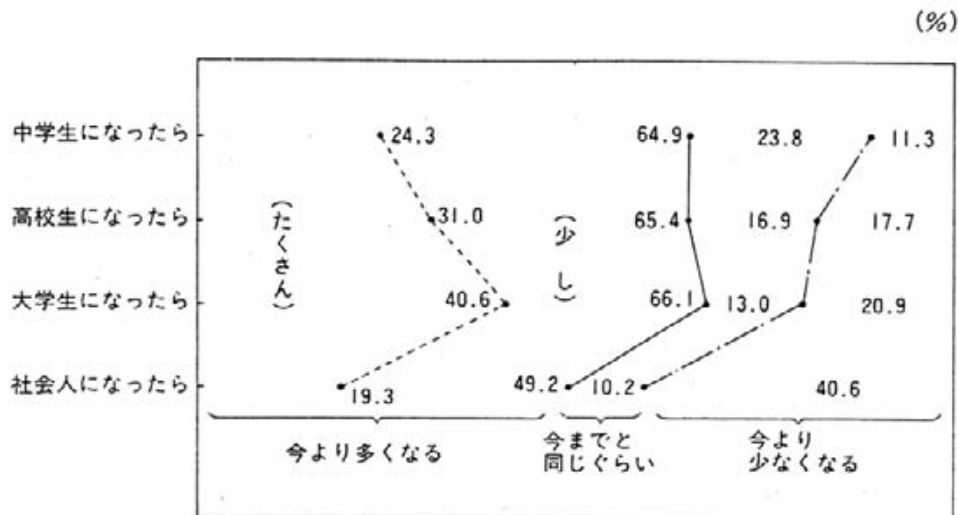


このように変化してきているのをうかがわせるデータである。

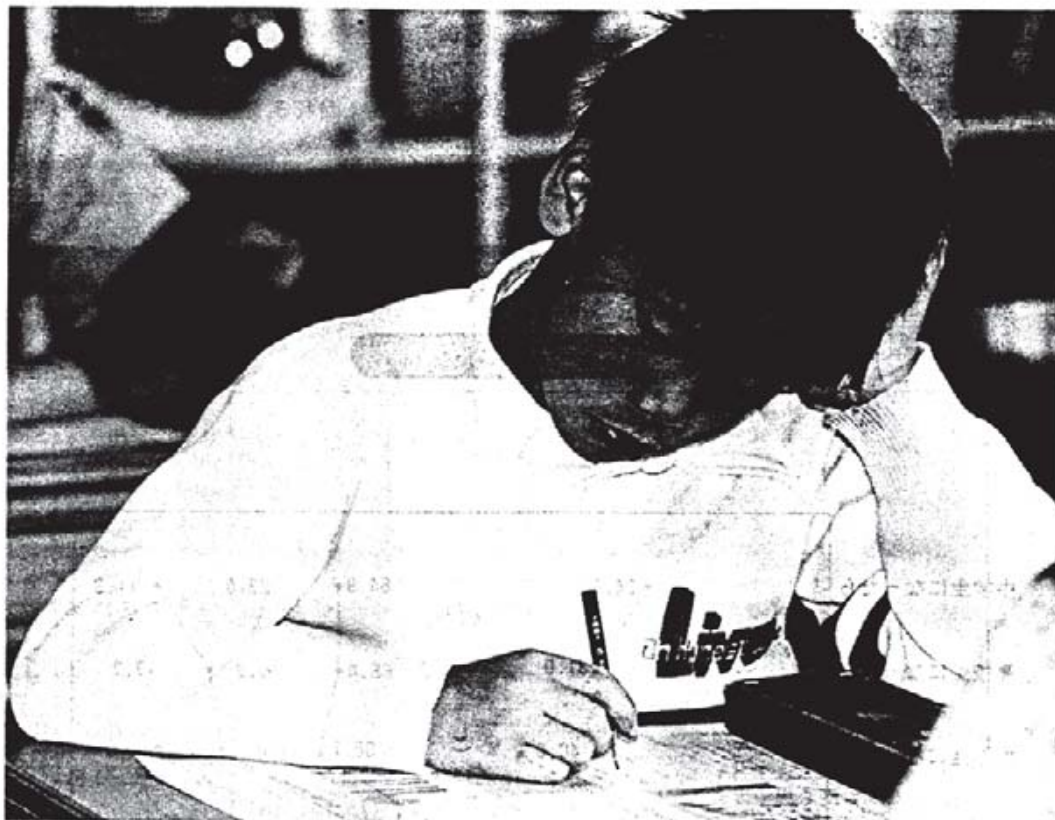
最後に、図11を提示しておこう。これは中学、そして高校へ進むにつれて、読書量がどうなるのかを推定させた結果だが、3分の2近くの子どもたちは、年齢が上がるにしたが

って、もっと読書をするようになると思われている。子どもたちによると、おとなになるとは、本を読むようになることなのかもしれない。

図11・これからの読書



3. 本の好きな子ども・嫌いな子ども



本の好きな子どもの読書傾向

今まで触れてきたように、小学生の場合は思ったより本を読んでいる子どもが多いような印象を受けた。しかし、これは子どもたちが活字離れをしているのではと思っているために生まれた評価で、読書量そのものは多いとは言い難い気がする。

しかし、これは子どもたちをトータルとしてとらえた時の見方で、当然のことながら子どもたちの中には、読書の好きな子どもと嫌いな子どもがいる。

とても 嫌い	4.9	} 11.6%
わりと 嫌い	6.7	

ふつうぐらい	36.5%
わりと 好き	23.6%
とても 好き	28.3%

そこで、以下この読書の好き、嫌いに着目して、そうした開きがどうして生まれたのか、そして、その差は子どもたちの価値観に、どのような意味を持つのかを考えてみよう。

まず、単純に好き嫌いのタイプ別に、持っている本の冊数を計算すると、平均は、

嫌いな子ども	21冊 (36%)
ふつうの子ども	24冊 (42%)
わりと好きな子ども	33冊 (53%)
とても好きな子ども	45冊 (67%)

()内は50冊以上持っている子どものおりとなる。

理由はともあれ、本が好きになるにつれて、持っている冊数が増加している。しかし、これを本のジャンル別にみると、図12のように図鑑や辞典、まんがなどの冊数は、本の好き嫌いとあまり関係を持たない。それに反し、

物語や童話、伝記などの冊数は、本の好き嫌いを反映している。

そうした意味では、本が好きとは物語や童話の本を持っていることにつながる。

そこで、こうした関連をもう少し具体的な書名を挙げて調べてみると、表4、表5のような結果となる。

物語や伝記を問わず、「嫌い」から「ふつう」そして「好き」になるにつれて、「読んだことがある」子どもの割合が増すだけでなく、そうした本を持っている子どもも増加している。

図12・読書の好き嫌い×本を持っている割合

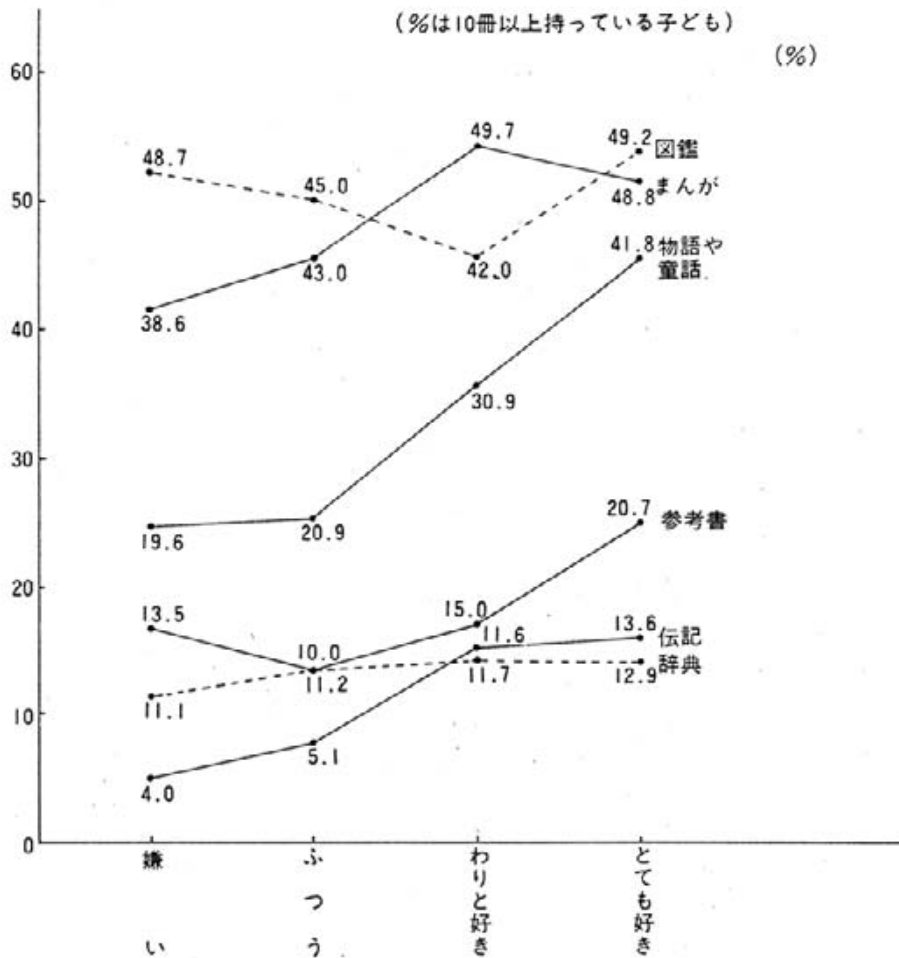


表4・読んだことのある割合×読書の好き嫌い

(%)

		嫌 い	ふつう	わりと 好 き	とても 好 き
物 語 や 童 話	トムソーヤの冒険	47.8	< 58.2	< 64.5	64.1
	赤毛のアン	43.0	< 57.5	< 60.9	< 65.3
	ピーターパン	45.7	< 52.6	< 58.8	< 63.3
	不思議な国のアリス	41.3	< 49.5	< 61.1	< 65.1
	ガリバー旅行記	38.2	< 50.5	< 55.2	< 64.8
	青い鳥	30.5	< 50.6	< 57.2	< 64.7
伝 記	ヘレン・ケラー	37.5	< 52.8	< 60.4	< 69.9
	ナイチンゲール	35.4	< 51.4	< 62.6	< 69.3
	エジソン	39.2	< 47.9	< 56.5	< 62.3
	野口英世	29.2	< 44.2	< 52.7	58.5
	キュリー夫人	30.1	< 43.9	< 49.5	< 60.3
	ファースブル	33.7	< 39.0	< 55.4	< 62.5

表5・本を持っている割合×読書の好き嫌い

(%)

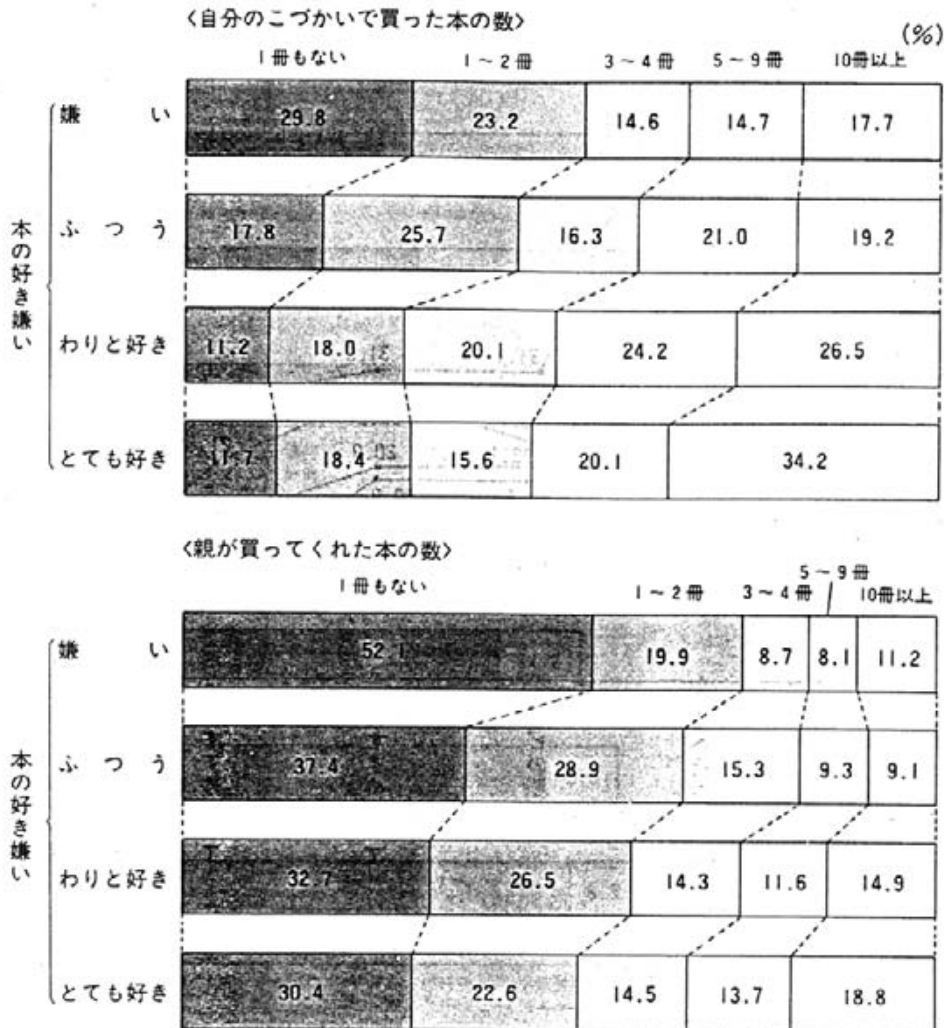
		嫌 い	ふつう	わりと 好 き	とても 好 き
物 語 や 童 話	トムソーヤの冒険	10.4	< 12.9	< 17.4	< 21.6
	赤毛のアン	13.9	< 18.1	< 19.4	< 20.9
	ピーターパン	13.0	12.9	< 18.7	< 18.9
	不思議な国のアリス	13.8	< 14.6	< 21.9	< 22.6
	ガリバー旅行記	13.8	< 15.0	< 16.5	< 25.8
	青い鳥	5.0	< 10.7	< 14.6	< 15.9
伝 記	ヘレン・ケラー	14.6	< 19.6	< 25.6	< 32.4
	ナイチンゲール	15.9	15.3	< 25.5	< 29.7
	エジソン	14.7	< 16.4	< 25.0	< 25.1
	野口英世	14.3	< 18.1	< 24.0	< 24.3
	キュリー夫人	11.9	< 14.0	< 19.0	< 27.3
	ファースブル	14.0	13.5	23.4	20.0

本の好きな子どもの読書行動

このように、本の好き・嫌いは、物語や伝記を読む、そして持つことと密接な関連を示しているが、もう少し細かく、本との接点を調べてみると、図13のとおりとなる。

つまり、本の好きな子どもが本を持っているのは、親から買ってもらっただけでなく、本人が自分のこづかいをやりくりしている場合も少なくないことを示している。

図13・本の求め方×読書の好き嫌い



事実、図14によると、本の好きな子どもは嫌いな子どもにくらべ、

- ① テレビで見たドラマの原作を買う
 - ② 友だちにすすめられた本を読む
 - ③ 先生にすすめられて本を手にする
- 割合が高まっている。つまり、本についてのあらゆる刺激に、本の好きな子どもが積極的

にとびつく傾向がうかがえよう。

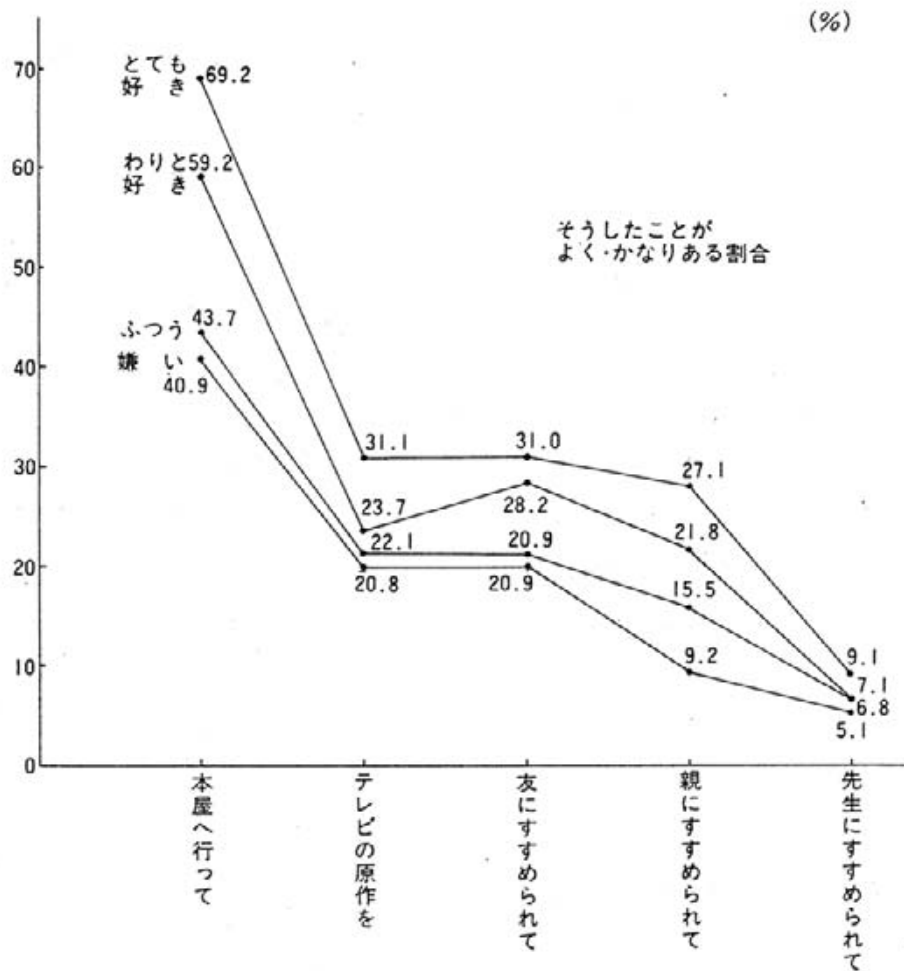
しかし、その中でも特に、

- ④ 親にすすめられて
- ⑤ 本屋へ行って

は、読書の好き嫌いに強い影響を与えている。

本人が本が好きで、本屋へ出かけるだけでなく、本人をとりまく家庭環境も、本の好きな

図14・本を読むきっかけ×読書の好き嫌い



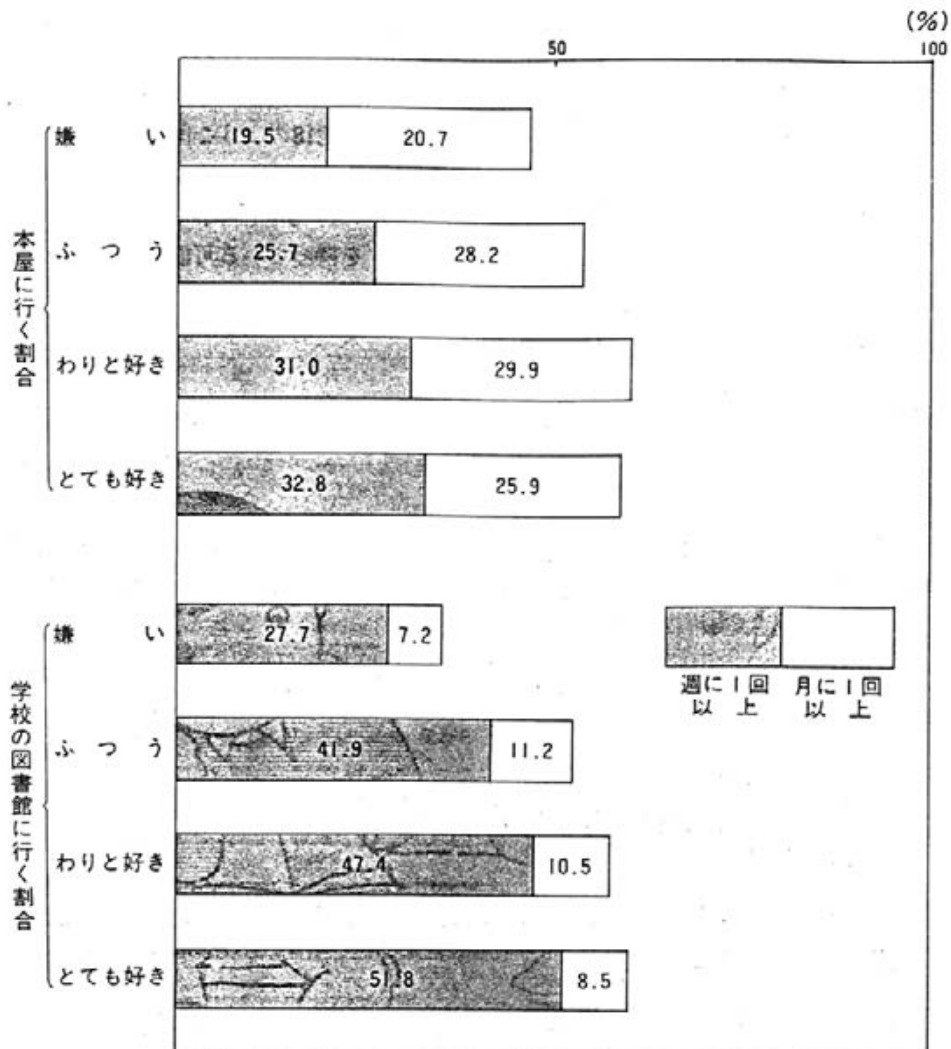
子どもを育てるのに適している。換言するなら、本の好きな家庭に生まれ、そうした影響を受けて、本人も、読書好きらしい行動をとり始める。そうした環境と本人の態度とが相乗された形で、本の好きな子どもが育つのであろう。

なお、図15によると、本人が週に1回以上本屋や学校の図書館(図書室)へ行く割合は、

以下のような比率を示している。

	本屋	図書館
嫌い	20%	28%
ふつう	26%	42%
わりと好き	31%	47%
とても好き	33%	52%

図15・本との関わり×読書の好き嫌い



本の好きな子どもの自己像

このようにみえてくると、本を読む頻度は、本人の態度と環境との相乗作用なのは明らかのように思われるが、図16、図17が示しているように、読書が好きな子どもほど、本を読むことをとおして「考える力がつく」「作文の力がつく」などの効用を期待できると考えている割合が高い。そうであるから、中学生、そして高校生になったら、今よりもっと本を読んでいくつもりだと答えている。

つまり、読書の効用を信じられるかどうか、本を読む態度の推進力を形づくっているとも考えられる。

しかし、これらは本人の意識の問題であるので、やや客観的に、本人の自己評価と読書の好き嫌いとの関係を調べると、表6のような結果が得られる。

①本の好き嫌いが、自己評価に関連を持つもの＝「知っている漢字が増え」、「本を読む速さが速くなり」、「作文が得意で」、「国語も得意になる」

②自己評価に関連しない項目＝「マンガの好き嫌い」や「友だちの数」との関連は認められなかった。

この調査では、この他の自己評価の項目は尋ねていないのでなんとも言い難いが、もう少し幅広く設問を試みるなら、読書好きの子どもは、図18のような国語の力だけでなく、未来像や現在の自分についての誇りなどの面で、本の嫌いな子どもより明るく健全な自己イメージを持っている可能性が強いように考えられる。



図16・読書の効用×読書の好き嫌い

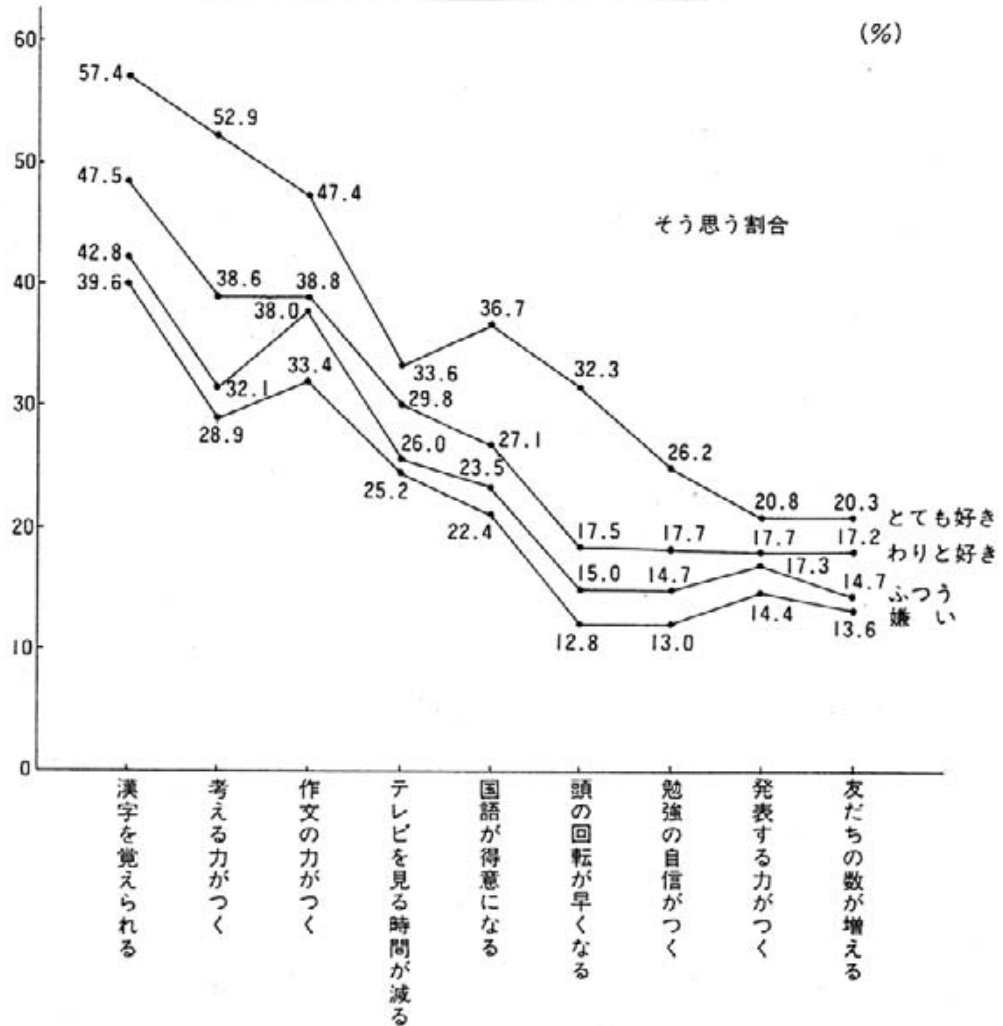


図17・中学生になってからの読書×読書の好き嫌い

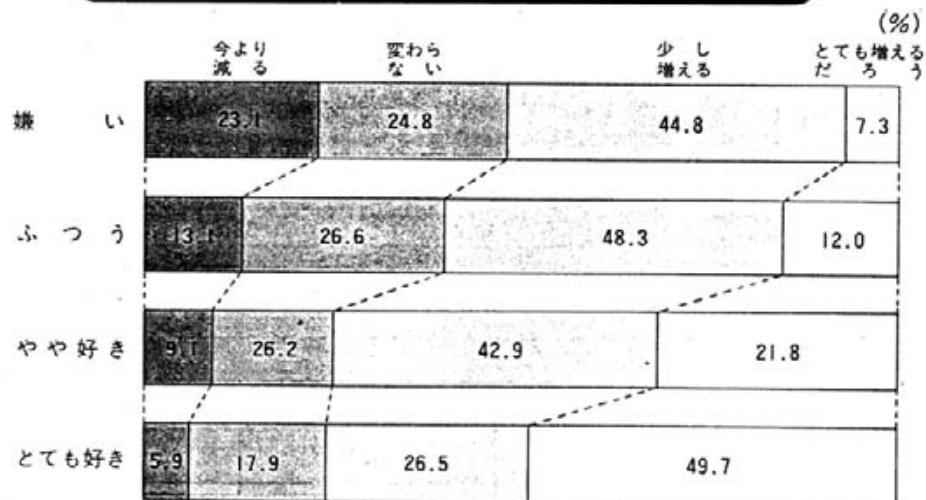


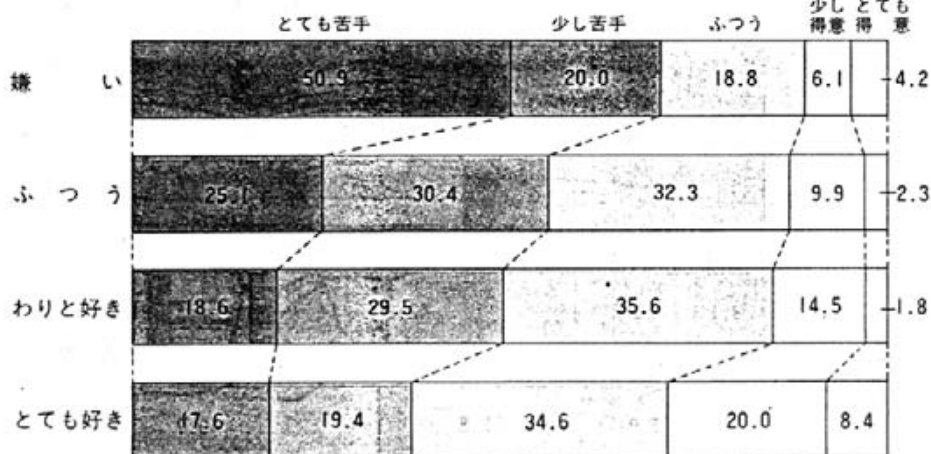
表6・本人の自己評価×読書の好き嫌い

(%)

		嫌 い	ふ つ う	少 し 好 き	と っ ち 好 き			
作 文	と っ ち 苦 得	50.9 10.3	> <	25.1 12.2	> <	18.6 16.3	> <	17.6 29.0
国 語	と っ ち 苦 得	34.3 12.6	> <	12.2 15.8	> <	8.8 27.6	> <	9.9 42.9
本を読む速さ	と っ ち お せ い は や い	30.1 10.8	> <	8.4 21.6	> <	1.5 33.5	> <	3.7 61.5
知っている漢字	か な り 少 不 多 い	32.7 18.1	> <	12.5 22.5	> <	10.0 29.2	> <	6.7 45.5
テレビ視聴	4 時 間 以 上 10 時 間 以 内	38.2 14.0	> <	26.3 27.9	> <	16.3 22.4	> <	22.0 30.3
ま ん が	と っ ち 好 き 嫌 い	21.3 27.5		17.4 17.9		20.4 18.9		31.7 19.3
友だちの数	と っ ち 少 不 多 い	2.4 33.2		6.7 38.2		4.4 36.1		7.9 40.9

図18・作文の得意・苦手×読書の好き嫌い

(%)



本の好きな子どもを育てるために

すでに触れたように、小学生を対象とした本調査の結果では、子どもたちは思ったより本と親しんでいる印象を受けた。したがって、現在の青年たちに見受けられる活字離れは、子ども時代から起因するものでなく、中学、そして高校へ入り、受験勉強が激しくなるにつれて、年齢相当の読書をしていないために

生じたものと考えられる。

しかし、そうしたマクロ的な分析はともあれ、現在の段階でとらえると、子どもの読書に強い影響を持つのは、本人の態度もさることながら、家庭環境のように考えられる。事実、図19に示したように読書の好きな子どもは、両親、特に読書好きの父親の下から育つ

図19・両親の読書の好き嫌い×本人の好き嫌い

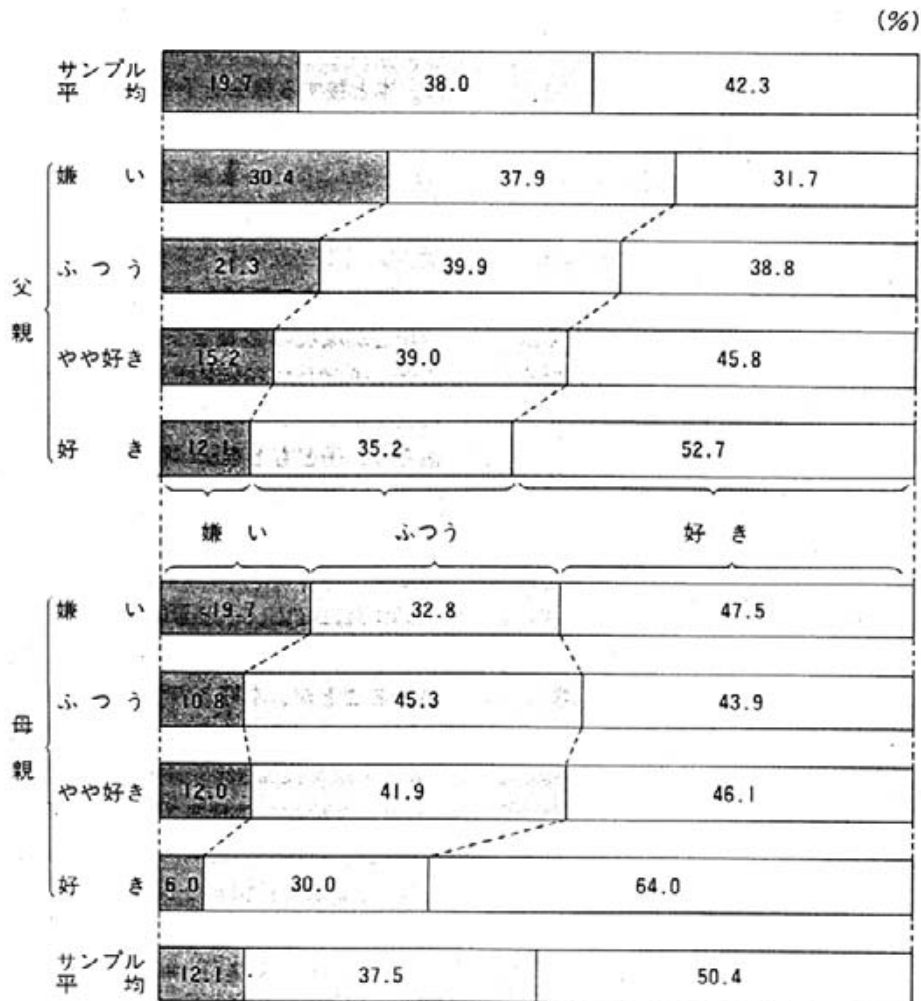


表7・読書環境×読書の好き嫌い

(%)

本人の読書	両親の読書		ふつう ぐらい	多 い	
	少 ない	多 い		少 し	多 い
嫌 い	27.6	23.9	18.4	16.6	13.5
	51.5			30.1	
ふ つ う	8.1	23.1	32.6	24.1	12.1
	31.2			36.2	
わ り と 好 き	4.7	17.6	28.5	32.4	16.8
	22.3			49.2	
と と も 好 き	4.7	10.7	16.2	25.6	42.8
	15.4			68.4	

可能性が強い。また表7によると、本の好きな子どもは、本の多い家庭から輩出されているとの傾向が得られている。

読書が人間形成に大きな意味を持つのは、

改めて触れるまでもあるまい。しかし、読書は本を読むという生活習慣の問題であるだけに、本と接する機会を子どもたちに多く与えることが必要であろう。

①読書量を増やす努力を

すでに触れたように、読書は対象を狭く限定しても、読み書きの力を伸ばすだけでなく、考える態度を育てていた。したがって、学校では推薦図書を作る、週当たりに読む本を勧める、読んだ本の感想文を書くコンテストをする、読書量を学級にはり、本を読むように奨励するなどを講じて、子どもたちを読書に親しませるべきであろう。

②読書好きの子どもを育てる環境作り

読書が環境の影響を受け易いことを考えると、子どもたちを本好きにするためには、親自身が本を手に行っている生活を送る必要がある。子どもと本屋へ行く回数を増やす、あるいは夕食後、曜日により本を読む時間をとる。時には家族で読んだ本の話をするなども必要であろう。

いずれにせよ、子どもに読書の持つ意味を熟知させると同時に、本と接する機会を多くさせることが、本好きの子どもを育てるための基盤作りのように考えられる。